

葵の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

明治大学博物館 外山 徹

祈禱所再興に向けての 一歩

天明元年（二七八）六月の一七世秀興入寂に間をおかず、十一月には師の隠居湛玄が遷化した。湛玄すなわち二六世秀憲は弟子の秀興とともに寛延の高尾山縁起を作成、清滝の開削や飯繩権現社の修築など二八世紀後期の躍進期を支えた。

一八世山主秀神

天明元年六月付の、秀興隠居にともない弟子の秀神が後任となることについて、門末寺院一同が熟談の上承知する旨の連印状が残る。日付から、もはや秀興の病も重篤な状況が推測される。そして、同月二八日、秀神は寺社奉行の下で宗派の行政を司る江戸触頭寺院から継目を仰せつかった。

一八世山主の誕生である。秀神は寛政元年（一八八九）に三八歳と年齢が判明しているので、この時三〇歳。満年齢で二八・二九歳は直ちに現在と比較できないにしても、若き山主の誕生であった。将来を嘱望された人材であったのだろう。

とは言え、半年をおかずして隠居湛玄をも失うなど、就任後しばらく目立った動きが無いのは、一山の運営が相当な重荷であったことも偲ばせる。秀神が山主を継いだ時期、高尾山も転換期を迎えていた。前号に触れたように、紀伊徳川家の大殿重倫側近からは先代と同様祈禱に励むようにと通信があつたが、緊縮財政とさらには重倫の出家によ

つて恒常的な祈禱依頼は停止されることになる。また、元禄一七年（一七〇四）以来の永代護摩檀家が書き記されてきた「永代日護摩家名記」の記名も天明四年で止まる。これをどのように解釈するかは難しいが、何らかの変化が訪れたことは感じられる。

天明と言えは飢饉が連想され、実際、気候不順や天災もあつた。同三年の浅間山噴火は高尾山の護摩檀家園であつた上野国（群馬県）や武蔵国北部（埼玉県）にかなりの被害をもたらしたと推測される。一方、天明年間には飯能から南方面への網取引の活性化が見られ、八王子が絹市場として多摩郡西部での優位性を確立する時期でもあり、高尾山周辺においては一概に停滞の時代だつたとも言い切れない。

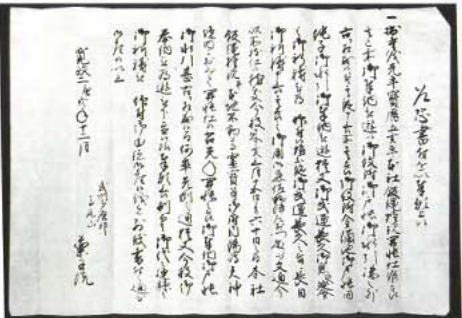
出開帳の出願

次に秀神の動きとして薬王院文書史料の中に表

れるのは、寛政二年（一八九〇）九月付の「当山絵図面下書」及び堂社の書上である。前者は高尾山内に散在する建物の平面図。後者は飯繩権現社・薬師堂以下諸堂・諸社の一覽表で、江戸の触頭寺院に提出している。物置ま

で書き上げたかなり詳細な図面と一覽がどのような意図で作成されたのか、提出先が触頭であるからには何らかの寺社行政上の要請なのだろうが、薬師堂については「当戊八月二十日、大風にて大木傾き倒れ打つぶし申しせうろ」と注記されている。薬師堂は現在大本堂のある平地に建っていた、山内でも戦国期以来の中心的な堂宇だつた。

の刷新と天明期における各地の荒廃を受けての対策を打ち出しゆく。世に言う寛政の改革である。清廉潔白で知られる定信だつて、財政緊縮の方針によつて寺社に対しても様々な規制をかけてゆくことになる。後々、堂塔修築が規制され、大造りの仏像・什物の新規制作が原則禁止となるが、その関わりかもしれない。それまで離伏の様子だつた秀神だが、一〇月には翌年三月十五日から五月一四日まで六〇日間、



書面を出るか？ 出願を願うか？ 提出されたか？ 果たして

江戸湯島天神にて出開帳を執行することを寺社奉行所に願ひ出た。寺社が繁華な都市に出張して本尊を公開する出開帳は幕府による許可が必要で、人々の浪費を戒める意味でその頻度は制限され、執行には特別な理由が必要だつた。そのため、願ひ書には「当八月二十日大風雨にて本社ならびに諸堂大破つかまつり、修復自力に及び難く難渋つかまつり」と述べられている。

しかし、ちよつと考えてみたい。大風による倒木は八月下旬のことで、願ひ出のわずか一ヶ月半前である。それに、先の書上では被災の注記は薬師堂だけだつたが、願ひ書では「諸堂大破」と大げさだ。江戸出開帳にも、実は周到な事前準備も必要であり、この願ひ出はいくら何でもタイムミン

するという点で、巨大都市江戸は大いに魅力的である。薬王院文書中の「永代日護摩家名記」では享保六年（一七二二）までは江戸の在住者が目立つが、それ以降は散発的となり、明和二年（一七六五）を最後に途絶えていた。次なる飛躍を目指して、江戸での信徒獲得を考えていたことは充分あり得る。

紀州家への寄進依頼

十一月に寺社奉行から出開帳の許可を得た後、翌十二月の日付をもつ紀伊徳川家に対する葵紋付の戸帳・水引の寄進依頼の文面が薬王院文書の中に残る。戸帳とは仏像を安置する厨子の扉を開いた開口部を縁取るように覆っている幕のこと。水引（帽額）も仏前に飾る幕の一種である。

朽化したというのが理由である。薬王院の側としては恒常的な祈禱所としての関係を復活させたい意図もあつたようである。宝暦の先例ばかりではなく、宗直以来、歴代の祈禱依頼や仏像・什物の寄進をこ

湯島出開帳の執行 出開帳は元文三年（一七三八）と同じ鎌倉川岸に「頼み入れ」、隣町の三河町二丁目とともに世話役を引き受けてもらっている。三河町の講頭太田屋徳兵衛は「先年より古く永代の檀家」とのことである。また、鎌倉川岸世話人頭取の矢野伊四郎他五名がこの時護摩檀家になったこと

いの様子で偲ばれる。三井越屋の毛氈二〇枚、同じく大手呉服商の伊豆藏から赤地金欄鶴亀模様



犬狛納奉中講川倉鎌